

## 後出しじゃんけんと棚占

奈良 敏行

(笈の定有)

『本屋のパンセ』（作品社）三月五日刊行（二〇二五）。三砂慶明さんの精力的な広報活動が始まった。三砂さんの「初発衝動」は「本を届ける」に焦点化する。本を届けるという情念には成りゆく勢いがあるので、迷うところはない。でも時に、その発火点の訪れは意識下のことなので自問自答する。それをわたしはオブセクションという。三砂さんのオブセクションは「読書」だ。読書はあまりに多様な姿を見せるので、結局、「読書する人」を訪ね、問うこととなる。

紀伊國屋書店新宿本店でのトーク（三月二日）では、『本屋のパンセ』の読みを、「日常の仕事を抽象的な次元で語る」と取りまとめた。抽象する力は人を救うこともある。「具体的なことで悩んでいる人は悩みを上位概念に運ぶことで解決を得る」と説明する。三砂さんはまた『千年の

読書』の要旨でもある「本を読む理由」を解き明かす。人は悩みをかかえる、本はその悩みに向き合ってくれ、他者、自分の心の中で言語化できないものを明らかにしてくれる。言葉にできれば「悩み」の絶対性から少し、片足でも抜け出すことができる。この読書への帰依が三砂十奈良の思想なのだ。

同じ日の夕方七時から千駄木往来堂書店でのトークだった。ご主人の笈入建志さんは、自分の日々の問題意識から一つのテーマを設定していた。笈入さんの選書努力で往来堂とその棚は、読者からもメディアからも高い評価を受け続けている。でもこれから数年健全な財政を維持し続けるとしたら、その両面の相互効果をもう一度考え直す時期にきている。そのヒントを三砂さんと共に考えたいということだった。

対談に耳を傾ける間に、一つの言葉が浮かんできた。必要とされるのは「後出しじゃんけん」ではないだろうかという意味不明の概念だった。辞書的には、成り行きをみて態度を決めたり変えたりすることとある。

笈入さんは町の本屋としては頂点に立っている人だ。人の思いつかないような工夫を取り入れ、坪当たりの売り上げも最高位の実績を続ける。その笈入さんが「変えたい」という。いくら超人的な書店人とはいえ、所詮はひとだ。

いつか「変える」ことの限界が訪れるのではないだろうか。「変える」から「変わる」、この方向転換の時がいつかやってくる。明日かもしれない、今かもしれない。しかし、もしその問いをわたしに向けるのなら、縮減へ向けて「変わる」ほかないと回答する。

「変える」というのはブランディングの創出だ。顧客に向けて企業の魅力を更新し続ける。成功体験を重ね続けた企業は創出を肥大させる。いつか限界がくる。多くの人々を満足させ続けることは難しい。

破壊的イノベーションという言葉がある。限られた人々に向けて特化する路だ。成功体験のリセット（これが破壊）だが、肥大した企業はできない。十から一になることは不可能だ。しかしゼロから一になることは容易い。「変える」でなく「変わる」、これを「縮減」と呼ぶ。縮減を可能にするのは「初発衝動」と「オブセッション」への回帰だ。本が好きで本屋を始めた。ならば「本が好き」へ縮減するべきだと思う。わたしは本が好きなのです。さてどうしたらいいのでしょうか、と一呼吸退くことだ。

「運・鈍・根」の「鈍」の見当識だと思ふ。繰り返して言えば、後出しじゃんけんというのは、身の丈への見当識だと思ふ。創出ではなく縮減。創出が上位概念へ質を変性させるのに対し、縮減は下位概念に質を変性する。その力

の源は「初発衝動」と「オブセッション」への回流だ。

三砂さんのトークの遍歴は続く。三月八日は福岡のブックス・キューブリック。大井美さんとの対談だ。

定有堂の棚のコメントの話題になった。普通、分類やコーナーを表示するべきところに、一見なんのかわりもないメッセージが記されている。往来堂は文脈棚と呼ばれ、きちんと見出し的に表示している。わたしはいつも本屋の空間は、「本」と「読者」だけでは何かが足りないと思ひ悩む。本屋の四面体をイメージすれば、あと「本屋の人間」、そして「言葉」が不可欠という気がするのだ。「言葉」はここで外部につながる。

文脈棚は表示と本がきちんと現実着地している。定有堂のメッセージは着地していない。例えば働く若い人のための棚に「また失恋したのですか？」と記してある。自分を慰めてくれる本を探していたとしたら、この言葉によって小さな覚醒が生じ、悲しみの反復よりも未来を拓く本の方へ視線が転換するかもしれない。現実着地とは本と動機が意味論的に紐づいているということだ。現実着地していないというのは記号論的な横の記号と記号のつながりだ。その分抽象的な飛躍が大きくなる。

説明すると難しくなるが、じつは簡単なことだ。解けない問いをかかえて本屋に入る。棚を巡る。そのとき棚板

に貼り付けられたメッセージが眼に留まり、問いが解けるわけではないが変容する。橋占(はしうら)という言葉がある。橋の上に立つて往来する人の言葉が耳に入り、それによって気づきを得る。辻占(つじうら)というのものもある。通りの辻で耳に入る言葉を外部の介入として判断の材料にする。定有堂は往来の延長として「棚占(たなうら)」のようなものを本屋空間に出現させたかった。「本」と「読者」に「棚占」が介入する。それが定有堂の棚の試みだった。

そうした棚の夢からいまは遠く離れ、棚から「笈」へと縮減するわたしの道行きを励ますように大井さんは、シンボルスカの詩を朗読してくれた。(「詩の好きな人もいる」)《そういう人もいる / つまり、みんなではない / みんなの中の大多数ではなく、むしろ少数派》

《詩が好きといっても—— / 詩とはいったい何だろう(略)でもわたしは分からないし、分からないということにつかまっている / 分からないということが命綱であるかのように》(ヴィスワヴァ・シンボルスカ著、沼野充義訳『終わり始まり』未知谷 1997)

そんな書き出しで始まる詩だった。「わからないということ」を心にあたためつけようという贈る言葉だった。

結局、「変わり行く」果てには「一人本屋」という希望

がある、と笈入さんには告げた。わたしはさらにその先の「笈の定有」という見立てを歩んでいる。

2025. 03. 12

(参考)

奈良敏行著・三砂慶明編 『本屋のパンセ』 作品社 2025

三砂慶明 『千年の読書』 誠文堂新光社 2022

エーリッヒ・フロム 鈴木晶訳 『愛するということ』

紀伊國屋書店 2020

ヴィスワヴァ・シンボルスカ著、沼野充義訳『終わり始まり』

未知谷 1997

笈の定有